

成島信遍年譜稿(十一)

久保田 啓 一

【キーワード】成島信遍・飛鳥山碑・幕府書物方日記・冷泉為久・服部南郭

元文二年 丁巳 一七三七 四十九歳

(追補)

○ 三月十一日、吉宗、飛鳥山に行き、遊樂。信遍は先に出向いて吉宗を迎える。この日、飛鳥山を金輪寺に下賜する旨の上意あり。また、この日に詠じた和歌二首を、後日、冷泉為久に呈し、点削を受ける。
〔飛鳥山碑始末〕、『諸家系譜』、『三世のなみ』

拙稿「成島信遍年譜稿(九)」(『広島大学大学院文学研究科論集』六七巻、二〇〇七年一月)の同項では、専ら『飛鳥山碑始末』に拠って記述した。以下に掲げる内閣文庫蔵『諸家系譜』と信遍の家集『三世のなみ』の記事については、年月日が記載されなかったために、根拠として用いることをせず、言及もしなかった。しかし、内容を考証して関連性が確定できれば、出来るだけ広汎に資料を取り入れ

るべきであると再考し、「年譜稿(九)」の項に追加する形で組み込むこととする。

『諸家系譜』の該当記事は次の通りである。

元文中月日不知、王子筋御成先被為召、飛鳥山桜花下ニ而御酒被下、清人之衣裳一具拝領、即着服御礼申上候処、衣服之まゝ帰宅可仕御沙汰ニ付、御暇後帰宅仕候。今日家蔵仕。

「元文二年日録抄出」にははっきりと三月十一日のこととして記載されるのに、『諸家系譜』にその情報がなぜ活かされなかったのか、疑問の残るところである。吉宗から唐服を賜るといふのは公的な記録としても価値のあるもので、蔑ろにされるべき事柄とも思えない。『諸家系譜』が寛政十一年の差出、享和三年の改定、『飛鳥山碑始末』が寛政十二年の成立と、いずれも信遍の嫡男和鼎が八十歳を迎えて以降の成果なので、資料の整理や編集の過程で混乱が生じたのかもしれない。

もう一つは『三世のなみ』の次の詞書と和歌二首である。内閣文

庫蔵本の本文に従って掲げる。なお、以下に和文和歌を引用するに当っては、漢字を通行の字体に改め、句読点・濁点を補い、本文に疑問のある箇所には(ママ)を傍記するなどの処置を取ることとする。

弥生の春の御かりに飛鳥山よりいそぎ参るべきよしうけ給はりて、まかりて侍しが、唐服給はり、酒たうべ、から歌をも大和歌をも奉れと仰ごとありしかば、から歌奉りし後にわが君がかざしの春の桜がり花も千とせの色かにやさくから衣花の香そへてぬぎかふる春のめぐみぞをきどころなき

その比、令泉殿^(ついで)下向あり、伝奏旅館にもていきて点削をうけ、清書して奉れと仰ごとありしまゝ、あけの日はを啓す。

二首ながらことよろしく候とて、清書してと仰ありて^(ついで)

内閣文庫本では、左註が次歌の詞書と接続し、「仰ありて、春の始」のように記載される。内閣文庫本の筆者が「その比」以下を「わが君が」「から衣」二首の左註と見抜けず、次の歌の詞書と誤認したため、このような形態となったのであろう。ほぼ同系の本文を有する大阪市立大学森文庫蔵本では、左註は次の詞書とは分離され、本文も「其比、冷泉殿下向あり、伝奏旅館にもてゆきて点削をうけ、清書して奉れと仰ごと有りしまゝ、あけの日はを啓す。二首ながらことに宜し、清書してと仰ありき。」となっており、こちらの方が優れる。特に末尾の「仰ありて」は、次に続けるために書写者が私意に改めたと思えない。一般的には安定した本文を有す

る内閣文庫本であるが、森文庫本他との校合は欠かせない。

『有徳院殿御実紀』巻四十五によつて為久達の動向を確認すると、「参向公卿の引見」は元文二年三月十一日。飛鳥山の遊樂の当日であった。翌十二日は公卿饗応の猿樂、十三日は公卿辞見、十四日には増上寺と寛永寺に参詣し、十六日に江戸を発して帰京の途についている。十一日に詠じた歌を為久に見せ、点削を受け、その翌日清書して再提出となると、十二日から十五日までのいずれかの日とまでは絞れるが、それ以上の詮索は難しい。

(以上、追補)

元文三年 戊午 一七三八 五十歳

○ 正月二十八日より以前、「諸家書付」の追吟味について、書物奉行川口頼母と相談する。 (『幕府書物方日記』十四)

諸家書付追吟味、浪人迄今日改、不残相済候得共、先比道筑ト申談候儀在之ニ付、追而今一応遂吟味可申候。

「諸家書付」の整理と点検については、書物奉行と信遍との間でこれまで何度も検討が加えられてきた(拙稿「成島信遍年譜稿(七)」、『広島大学大学院文学研究科論集』六四卷、二〇〇四年一月)。書物と違って紛れやすい史料の集積であるために、目録化と共に絶えず「追吟味」が欠かせなかつたのであろう。信遍と頼母

が相談した内容とその日時は明らかでないが、追吟味を完了してもなお問題が残ったらしい。

○ 正月、奥医師数原通玄が五十歳を迎え、「数原通玄先生の五十を賀せることば」(『芙蓉楼全集』巻十一)を作って祝す。

数原通玄は享保十四年六月十三日に奥医師となり、同年十二月十六日に法眼に叙せられた。明和三年(一七六六)正月十三日に七十八歳で没した(『新訂寛政重修諸家譜』第二十、三五九頁)から、元文三年は五十歳、信遍と同年である。吉宗の側近として信頼厚かったようで、『有徳院殿御実紀附録』巻十五では奥医師の筆頭の名が挙がり、その名医ぶりを物語る逸話が紹介されている。信遍とも親しく交際したものと見える。

「数原通玄先生の五十を賀せることば」は、通玄の本姓である橘に因む和漢の故事を並べること主眼があり、通玄の人となり伝えるという点では物足りないが、吉宗を取り巻く文化圏の雰囲気を知る上で有益な資料となろう。『芙蓉楼全集』(以下『全集』と略す)所収の文以外に伝存を確認できないので、『全集』に従って翻字する。

数原通玄先生の五十を賀せることば

通玄先生橘の尚白、ことしこよろぎのいそちなりとて、子なるぬしのもとより、相しれるかぎり、寿のことばをもとめらる。

あし曳のやまとうたは、いかほの沼のいかなることをもてか、ことのはをこふべきと聞えたるまゝ、その氏姓のよすがをもて、橘はとし久しといふ題やしかるべからんと、えりてつかはしける。

いでや、たちばなのためでたきためしをかぞへば、浜の真砂数もつきせじ。小鹿の角のつかみじかき筆にはいかにつくしけむ。それが中に、かつらぎのおほきみをほきたる言の葉、ならの葉のふるき世にもきこえ、人の国にては、その泉のみさらひをくみていのちを延ること、南陽のきくにひとしく、商山の樂しみ、かの実のうちにおなじと、囲碁せし仙もいへりとかや。をのゝみゆきに雪うちゝれるほど、白がねのけにもれりしは、こがねの色けざやかにはへて、おほみきゝこしめしたりけむ。むかし、いときなき人の、君の賜とて懐になむものせし、愛けうあることなり。しかあれば、郭公もそのかけになづさひ、いにしへを忍ぶ軒ばには、故となつとなる人もいみじうめでぬるものをや。かのさるがうことにも、いまも蓬萊の島にある宝といひ、うち日さす雲井の庭に、右の衛の名世にふりぬ。近きよにも、から人のまろうどを饗するには、橘のこゑのきちにかよへるをとりて、かならず供しぬるとぞきく。

されば、からもやまとも、いにしへいまにおよびて、かゝるなおへるものにしあれば、いそちのけふにあひて、五百とせ千代万代のさちもあひにあふためしあれば、みさへ花さへその葉

さへつたなきこと葉にそへ侍らむこと、中々かたはらいたふや侍らんかし。されど千代もと祈る心ざしを思へば、さすがやむべくもあらねば、

ことの葉のはなたちばなや幾千代のやどのみぎりに色をそふらん

たちよらむ千とせのかけはたちばなのみさへ花さへ榮へゆくやど

△ 正月、服部南郭、「飛鳥山碑帖序」(『南郭先生文集 三編』巻五)を撰する。

日野龍夫氏『服部南郭伝攷』の元文三年正月に立項(二八四頁)。日野氏が「南郭の序は、金輪寺の僧が碑文の拓本数十部を特製したと述べるから、おそらくはその拓本に冠するために書かれたもので、版刻されたのであろうが、拓本の実物は管見に入らない。」(同書二八五頁)といわれる通り、この序は拓本を装丁した法帖の巻頭を飾ったはずだが、拙稿「成島信遍年譜稿(十)」(『広島大学大学院文学研究科論集』六八巻、二〇〇八年一月)の元文二年閏十一月十二日条で言及したように、この時期に製作された法帖は伝存しない。南郭序が付された現物の発見を期待するしかないが、南郭の発言から元文三年正月段階で法帖が数十部作られ、希望者には頒布されていたことが判明するだけでもよしとしなければなるまい。南

郭の文章は信遍の盛事を称揚して余す所が無い。

以下、『詩集日本漢詩』第四卷(汲古書院、一九八五年)所収の影印によって書き下して示す。ただし、一部訓読を改めた所がある。

飛鳥山碑帖序

飛鳥山の碑立つ。都下伝へて盛事と称す。其の代撰する所の鳴帰徳、文名日に隆に、紙、之が為に貴し。而して又其の書篆楷、気格高古、絶えて後世軽俊の跡無し。帰徳亦自ら其の得る所を知らず。即ち自ら称する所、此れ且く神助有る者なりと。

且つ碑体高大、石理堅密、青瑩光潤、質に依りて奇を成す。蓋し之を聞く、帰徳所在采択して之を御苑に獲ると云ふ。故に都人士其の側に賞観し、相仍つて群を為す。而して得て縦に墨すべからず。王子金輪寺僧都宥公、遠く之を世に伝ふるに志有り。乃ち一二奇巧の士、力を戮はせ、相助けて之が為に数十本を打ち、且つ装して帖と作す。蓋し蔵して以て其の人なる者の需むるを待つとなり。其の帖亦大に奇観を作し、古墨本と異なること無し。是に於いて都下益相伝へ称す。蓋し夫れ飛鳥山王子の境に隸し、宥公碑を立つるの挙、固より其の文に詳らかなり。則ち帰徳に論無し。即ち宥公の遭遇、万古朽ちず。然れども石転ずべからず。而して帖は則ち將に之を万国に伝へんとす。豈に亦盛事ならずや。竊に惟るに、今時人人好む所、典厚俗を成し、雅賞古に踰えたり。固より亦昭代文徳の化なり。乃ち此の

事小なりと雖も、以て其の大なるを推知すべし。宥公、人をし
て余に序を属せしむ。余乃ち宥公の文雅を好尚するに撃節し、
亦帰徳の為に喜びて其の事を言ふこと此の如し。元文三年春王
正月。

○ 二月一日、吉宗の命を受けて、「熊野三神伝」を金輪寺に奉納
する。
〔飛鳥山碑始末〕

『飛鳥山碑始末』の「碑考」の当該箇所は、すでに引用したこと
があり、前後の経緯も含めて概略を述べた（拙稿「年譜稿（十）」
六四頁）ので、詳しくはそちらをご参照いただきたい。

○ 三月十三日、古梅園に松烟墨の注文を出す。

〔古梅園記録』巻之二〕

奈良墨の老舗古梅園に伝わる『古梅園記録』は、墨を通して古梅
園の代々が朝廷・幕府や文人墨客達とどのような交渉を持ったかを
具体的に物語る稀有の資料である。幸いにして大谷俊太・久岡明穂・
的場美帆・豊田恵子四氏により『古梅園記録』解題と翻刻（上）

（中）（下）（『叙説』三二号、二〇〇五年三月、同三三号、二〇〇
六年三月、同三四号、二〇〇七年三月）として全文が公開された。

『古梅園記録』巻之二の元文三年三月十三日の条に次のように信遍

が登場する（「解題と翻刻（上）」八〇頁、ただし句読点は私に打ち
直した）。

同三月十三日、成島道筑老より、古今秘苑墨方以製候松烟墨、
被仰付候。

正徳五年正月の松井和泉掾の「覚」（巻之二所収、「解題と翻刻（上）」
六九〜七〇頁）によれば、唐土では専ら上品とされた松烟墨と同じ
程度の上質な製品を日本でも作り出すことが古梅園に期待されてお
り、漸くにして正徳三年に製造に成功したという。唐様の揮毫に最
適の墨を信遍が求めるのは当然で、古梅園としても、江戸で著名な
信遍の注文を受けたことは特筆に価したのであろう。

なお、この年の夏には「古梅園大墨のことば」を和文で認めるこ
とになる。冒頭に松烟墨の沿革を述べるに当り、実物の入手が不可
欠であったと見れば、二つの事柄は連動した文事として理解する必
要がある。

○ 三月、冷泉為久に飛鳥山碑文を法帖に仕立てた「飛鳥帖」を献
上し、「飛鳥帖といふものを冷泉殿に奉りしこと葉」（『全集』巻
一）を記すか。

元文三年の為久達の江戸滞在を『有徳院殿御実紀』巻四十七で辿
れば、三月一日公卿参向、二日公卿引見、四日饗応の猿楽、五日公
卿辞見、七日に江戸を発して帰途についている。「飛鳥帖」を献呈

するなら、出来たばかりのこの時期を措いてはありえまい。『飛鳥山碑始末』の「恩遇」には次のようにある（引用は国会図書館本）。

其頃伝奏の公卿冷泉大納言為久卿は、其父なる為綱卿よりして父なりし人の和歌の師にて、古今集の奥旨まで伝え給へりしが、折節関東へ下向ありしかば、上より密に命ぜられて、此飛鳥碑の搦本を帖となして、かの大納言に奉りしかば、垂相、帰京の後、其搦本を天子の勸覧に備給へり。それにつけて仮名の文章かきて和歌をもそへて奉りしも、同じく天覧を歴たり。時に天気ことにうるはしく、歡感浅からず。直に九重にとゞめて大内の宝庫に納められしとなり。これ又言外の天幸、吾家不朽の光榮なり。

次に掲げる「飛鳥帖といふものを冷泉殿に奉りしこと葉」も同時に為久に献ぜられ、さらには宮中にまで上ったことが判明する。『全集』を底本として掲げ、国会図書館本『飛鳥山碑始末』「麗藻」との異同を注記する。なお、『全集』のこの文章については、校合者の傍注が括弧入りで付してあるため、本文と傍注をそのまま再現するよう努め、『飛鳥山碑始末』との異同とは区別できるようにした。

飛鳥帖といふものを冷泉殿に奉りしこと葉

これよりさき、官命によりてとしまのこほりあすかの山に石ぶみをいとなみたてゝ侍りしに、その道にふけるともがら、これをもちろしの鳥のあとにならずへ、石ずりといふものにな

し、飛鳥帖と名づけ、わらはべの手ならふたよりとなしぬ。そもくさかわざ^(る)①は、かうめう^(高)の筆の花もさき、もんじやうのみちもとより②ゆりたるはかせだつ人のうへにこそものするわざならぬ。この国にしては、みちのくにのつぼのいしぶみのみぞ、しかすりたるは見し。これなんあり所はきけど、さだかもあらざりしを、近き世となりて、その国多賀といふ所に③まさしく掘出たるとなん。そのいとなみしは天平宝字の比にあれば、ほしうつり物かはる④世々を経て、もじのすがたもあやしく妙に、鳳凰のかけり竜虎のふるまへるさま、おさく／今の世にあるべきすさみとも見えず。こだいのものにしあれば、世にゆつりて⑤これをもてはやせるも、ことはりにかなひてやあらん。

されば春蚓秋蛇などはかなき嘲をあとの世に⑥ひき出ぬべきあまのしにざ^(わ)⑦は、うらのみるめもころぐるしく、なみのたちみにかたはらいたうわびあへりしころ、冷泉の御家に、関の東御下向の序⑧、これを奉るべきよしそゝのかしきこゆるが、あまりにむくつけう、あさましきまでおぼえしまゝ、いかでさる事⑨あらんとすゞるにいなびつれど、これは私のいとなみし物にもあらず、花の所にさへ立をかれて、玉ぼこの路ゆきぶりに、たかきいやしきあふさきるさにめなるゝものから、いさゝかへだてたるかたにあれば、やむごとなきおほんわたりには、たまさかにも御らんぜさすべき折しもあらぬを、さらばひ

たすらにものすべきよしすゝめて侍るまゝ^⑩、はゞかりの関のはゞかりあれど、いさゝかさうぞきて奉りぬるつゝゐでに、あさかの浪^⑪のあさきことの葉かきそへ侍るものならし。

とぶ鳥のはかなき跡もよしやその雲ぬの人よあはれ見そなへ

- (1) さかわざ——さるわざ(『飛鳥山碑始末』)
- (2) もんじやうのみちもとより——もむじやうのみちも世(『飛鳥山碑始末』)
- (3) 所に——所(『飛鳥山碑始末』)
- (4) 物かはる——物かはり(『飛鳥山碑始末』)
- (5) 世にゆつりて——世にゆすりて(『飛鳥山碑始末』)
- (6) あとに世に——あとに世にさへ(『飛鳥山碑始末』)
- (7) しにぎ——しわざ(『飛鳥山碑始末』)
- (8) 序——序に(『飛鳥山碑始末』)
- (9) さる事の——さることや(『飛鳥山碑始末』)
- (10) 侍るまゝ——侍るまゝに(『飛鳥山碑始末』)
- (11) あさかの浪——あさかのぬま(『飛鳥山碑始末』)

○ 夏、「古梅園大墨のことは」を撰文する。

寛保二年跋刊『古梅園墨譜』に収録される他、『全集』巻六にも入る。版本に従って本文を掲出する。また、『全集』との異同の箇

所に通し番号を打ち、底本の本文を掲げ、『全集』の本文を対照させる形で注記を施した。

古梅園大墨のことば

繩をむすび、竹にゑりて、文字をかよはせしことは、あがりてのよのことにして、よろづわいだめなきむかしになむ。人の心花にうつり、世のさまみやびをことゝせしより、夏野ゆくおじかのふでをはじめ、すゞりの池^①に墨かきながすことゝなりにけるより^②、詞のはやし世にしげり、とりの跡いまもたえせず。しかあれば神がきの内外の国の教をはじめ、支那のひじりのみち、しかのその、わしの山のみににおよぶまで、松の葉のちりうせず^③、呉竹のよゝにかき伝へて朽せぬためし、またなきたからなるべし。もろこしにては千とせふる松のけぶりをおさめ、おじかのつゝにかはといふものにあはせて、空だきものゝ多ならぬにほひをうつし、あやしき光をそふる葉だつものをさへなにくれとくはへ、上のしなより中しもの定くさゝく^④にわかれ^⑤、いろ／＼に伝ふるとかや^⑥。此国にしても、いづれのみかどの御ときにかありけむ、三のお山にみゆきまし／＼けるつゝゐで、松にかゝれるふじ代といふわたりにして、つみおける松烟^⑦をみそなはし、かれいかばかりの物ぞなど心みさせ給ひしといふは、まさしく松のうへにして、ともしびのにはあらざめり。ときうつり、ものかはり、人のすさみもあらたまり、

松のはすさめられて、ともしびのかたのみにいまは里々にあきものし、家々にもてはやせることとなりぬ。なべておとろへさかふるはよろづのことはりにして、人のうへにのみやはある。

あはれ我君天のしたしろしめす^①より、みちのひかりよろづあきらかに、絶にしあともふたゝびおこれるにあひて、にまなくだらのみつぎたゆるときなく、ものゝふのいさめるみちは更にもいはず、右文のおしへ^②、朝日のはじめてかゞやき、月のゆみはりいやさかえゆくほど、みな人ほたるをあつめ、雪にむかひ、唐のやまとのことの葉、玉にみがき、こがねをちりばむ。さればふるきをしのびてあらたなるをわきまふるにつけて、百のたくみのみちもあやしく妙に、はかなきすすみさへくはしくふかきにいたれるを見きく。いづれに治れるよのすがたなるべし。

爰にいにしへのならのみやこに和泉の掾松井のもとやすといへるあり。箕裘の業に墨つくれることをつぎて、ふみのみち稽古のほまれも世にとゞろきたるが、すける心ざし深く、花にそへ、とりにつけても、遠つ祖より伝へこし家の風を吹起してむとねがふのつとめ、せちに怠ることなし。さればありとある人にとひて、からのやまとのしななたちども、こゝらつくりいづる序に、車の榻ばかりにしておもさ廿五斤の墨をつくりいでつ。めもあやなり。ひとへにいにしへにならずらへて、松のけぶりをもててうじぬ。はからず九重の雲のうへまで聞えあげ、は

た関の東の御まへわたりにもけいし奉りぬることとなりぬ。されば此国のはかせのみか、人の国のことの葉どもあまたとりよろひ、家のめいばくかぎりなき世にのこしぬ^③。女のもじのかたのみいまだそなへねば、これをかまへいでよ^④とひたすらすゝめ侍れど^⑤、もとよりあまざかるひなにうまれて、かきねのこぐさつかみじかき筆には、いせのうみふかきこゝろもわきまふる才なければ、いはせの山の上ぶこどりいかなるねにかたてゝまし。さてしもむさし野の露分衣旅にしあれど、みなれそなれて杜の空蟬猶人がらのなつかしき心をみては、山がつの垣ほへだてず、柴の戸のしばくいなびがたくて^⑥、墨つぐ筆をこゝろみ、そのかたはしをかきつけぬるものならし^⑦。

元文三の夏

みなもとの信ゆきしるす

- (1) すぎりの池——すぎりのうみ〔全集〕
- (2) なりにけるより——なりにければ〔全集〕
- (3) ちりうせず——ありうせず〔全集〕
- (4) わかれ——わかち〔全集〕
- (5) とかや——とや〔全集〕
- (6) 松烟——松の烟〔全集〕
- (7) しろしめす——しろしめする〔全集〕
- (8) 右文のおしへ——文を右にするのをしへ〔全集〕
- (9) のこしぬ——のこしけり〔全集〕

- (10) かまへいでよ——かいてよ〔『全集』〕
 (11) すゝめ侍れど——すゝめけれど〔『全集』〕
 (12) がたくて——がたく〔『全集』〕
 (13) ならし——なるらし〔『全集』〕

○ 八月一日、七月二十五日に書物奉行深見新兵衛より上申のあつた「聖濟総録纂要」の傍書案につき、小性土岐左兵衛佐朝直から上申の通りに訂するよう指示され、その旨を新兵衛に伝達する。

〔幕府書物方日記〕十四)

先月廿五日、聖濟総録纂要之傍書存寄認候而、左兵衛佐殿え申達置候処、存寄之通ニ相濟候由、今日、道筑を以被申聞候。近日御目録ニ認可申候。

七月二十五日の詰番も深見新兵衛だったが、当日の条には「聖濟総録纂要」の傍書案申達の記事は見えない。八月一日になって信遍から指示が下って、あらためて先日の出来事を思い返し、遡って記述したところだろうか。

○ 九月十二日、文昭院手沢本の扱いについての書付を、書物奉行水原次郎右衛門に渡す。

〔幕府書物方日記〕十四)

兼而申談候御前本之義、目賀田長門守殿へ申入置候処、此間被相伺、文昭院様御手被触候御書物、○印七部ニ相定、箱無之ハ箱等可申付旨被仰出候由、尤、村上市正被申候趣も役所ニ留置候様ニ、昨日被申渡候。此間差出候書付ハ道筑へ渡し置候由。依之、今日罷出、道筑へ対談、書付請取之候。先日差出候書付(マ)ニ付札有之候。

書物奉行と小性目賀田長門守咸との交渉の結果、六代將軍家宣の手沢本が目録に○印のある七部に決定し、箱の無いものには箱を新調するようにとの指示が下った。もともと家宣の小性を勤めた村上市正直の見解も文書として残すなど、慎重な処理がなされている。そして書物奉行から提出された書付は、信遍を介して目賀田長門守から返却されることとなった。

なお、翌十三日の記事によれば、「御前本」十七部のうち八部に箱が無かったという。九月十二日の記載で「七部」とあるのは、本来は「十七部」の誤りなのかもしれない。

○ 九月二十四日、川口頼母より「御当家御目録」の下書を見せられ、一覽の上預る。

〔幕府書物方日記〕十四)

此度下書致出来候御当家御目録一冊、今日、成島道筑え見七候処、与得致一覽、追而可申聞由ニ而、右御目録、道筑預り置申

候。九月廿九日かへる。

先月、文庫では「御当家御目録」と「諸家書付目録」の下書の吟味に従事していた(八月十五日条)。八月二十四日には「御当家御目録」の順次を決定している。こうした作業の結果、徳川家の蔵書目録の下書が完成し、信遍がその点検に当たることになったのである。実務家としての能力と学識が買われてのことと思われる。

ちなみに、内閣文庫蔵『文庫始末記』(『幕府書物方日記』三に附録として収録)の元文三年九月廿四日条にも、「御当家類ノ目録、成功シテ、成島道筑へ授ス。」(四〇二頁)と記される。

○ 九月二十九日、川口頼母へ「御当家御目録」の下書を返却する。

(『幕府書物方日記』十四)

前項九月二十四日条の当該記事末尾に「九月廿九日かへる。」と補記されることで判明するし、二十九日条では次のように念を入れて記述される。

右之節、成島道筑え去廿四日預ケ置候御当家御目録、道筑より相返し、請取之候。近日清書可申付候。

「右之節」とは、この日、御側衆渋谷和泉守良信を通じて奥から「閩書」他四点が下ったという記事を受けての言葉で、信遍から下書が返されたのもこの時だったということになる。常識的に見て、

「閩書」その他の返却の実務にも信遍が携わっていたことが推測される。

○ 十月二日、書物奉行奈佐又助・川口頼母より差し出された「諸家書付」の新規継立分五巻を小性小堀土佐守政方に取り次ぐ。

(『幕府書物方日記』十四)

此間道筑を以、小堀土州被申聞候諸家書付之義二付、今日又助・頼母罷出、大名諸簞本小普請之内、新規つぎ立候分五巻出之、道筑へ見せ申候所、早速土州一覽之上、宜敷出来いたし候由被申聞候。右不残下り候間、元のごとく納之。

小堀土佐守政方が信遍を介して「諸家書付」の「新規つぎ立候分五巻」について指示を出したのがいつなのかは、例によって判然としない。信遍は、又助と頼母から提示された五巻を早速政方の元へ持参し、一覽を仰いだ。

○ 十月二十日、御側御用取次加納遠江守久通に申達したとして、書物方に「山城志」他五点の差し出しを書面で指示するが、すでに用済みとのことで、口頭で書物奉行桂山三郎左衛門に持ち帰りを依頼する。

(『幕府書物方日記』十四)

成島道筑、遠江守殿へ申達候旨ニ而来書、(中略)、右、持出候
 処、最早御用相済候由、道筑申候ニ付、持帰、元番え相納。

『幕府書物方日記』十四の校訂注記によれば、「右、持出候処、

最早御用相済候由、道筑申候ニ付、持帰、元番え相納。」の部分は
 貼り紙による訂正で、元は「右之通道筑え相渡ス。届書如例差出之。
 道筑手紙日記ニはさミ置候」とあつたらしい。そうなると、「山城
 志」他五点は一旦信遍の手を経て奥へ差し出されたが、用済みとの
 判断がなされ、すぐに持ち帰りとなつたと考えられ、桂山三郎左衛
 門はそれまでの経緯を知らしめる形で日記に修正を施したと見てよ
 いのであろう。

○ 十一月六日、目賀田長門守からの「禁衛律」の存否の問い合わせ、及び校合の指示を、桂山三郎左衛門に取り次ぐ。

〔幕府書物方日記〕十四)

目賀田長門守禁衛律一冊被差出、御文庫ニ有之哉否、并校合之
 儀被申聞。取次道筑。 則御藏え持参、校合畢、返上之。尤、御藏ニ
 在之段も申上。

この場合は、必ずしも信遍の学識を必要としたわけではなく、単
 なる取次ぎだったようである。

○ 十一月十七日、奈佐又助・川口頼母の両名、「御書目録」を御
 殿に持参するが、出勤日ではなかったため、受け取れず。

〔幕府書物方日記〕十四)

御書目録書入とち直し相済候ニ付、今日、兩人、御殿え持参い
 たし候所、道筑出勤日ニ無之ニ付、無其儀、来ル廿三日差出申
 積リニ申合候。

○ 十一月二十三日、御蔵の目録を持参した奈佐又助・川口頼母の
 両名と対談し、御小納戸の目録との引き替えに立ち会う。

〔幕府書物方日記〕十四)

御蔵之御目録、今日兩人、御殿え持参、道筑へ対談、御小納戸
 目録引替相済、則上ノ間日記たんす之上ニ差置申候。

文庫の目録には、御蔵での実務用と御小納戸備え付けとの二種が
 あつたらしく、点検には双方の相互検討が必要だったのであろう。
 書物奉行が信遍の勤務日を確認して改めて持参したのが二十三日
 だったと思われる。

○ 十二月五日、「御前御目録」を持参した川口頼母に対応し、十
 一月二十三日に差し出された御蔵の目録との引き替えに立ち会

う。

〔幕府書物方日記〕十四

〔付記〕

今日、御前御目録致持参、差上之候。先達而上置候御蔵之御目録ト引替、相下ゲ申候。尤、道筑ヲ以引替之候。

本稿は平成二十一年度科学研究費補助金基盤研究（C）「近世冷泉派歌壇の伝存資料についての研究」による研究成果の一部である。

昨年の御同朋格奥務昇進以来、信遍と御文庫との関係も微妙に変化したかのようなようである。すなわち、文庫や書物奉行との連絡調整や仲介の実務が全体として減少したように見受けられる。それは『幕府書物方日記』における信遍の登場頻度の低下に端的に現れている。奥御殿の文事の中核に確かな位置を占めるに足る立場を公的に得た信遍の、さり気なくも着実な境遇の変化をここに認めることが出来るのではないか。

○ この年の武鑑から、河合久円・岡本善悦とともに「御同朋格奥務」として諸御役の部に登載される。

須原屋版の信遍の項には「浅くさ鳥ごへ」との所付がある。ちなみに須原屋版武鑑は第三冊が諸御役の部にあてられるが、その冊の目録には「御同朋格奥務」の役職名がない。前年末近い頃の昇進のため、武鑑の編集が隔々にまで行き届かなかったのであろう。

A Chronological Record of Narushima Nobuyuki' s Career (11)

Keiichi KUBOTA

I have written Narushima Nobuyuki' s career from 1689 to 1737 in series. This paper contains a revised and expanded edition of the chronological record (9), and his career in 1738.

He published an epigraph of Asukayama Monument as a calligraphic example, with a foreword of Hattori Nankaku: the most famous poet in Edo, and dedicated it to Reizei Tamehisa: his teacher of *Waka*.

After getting promotion to Godouboukaku, his work as a librarian decreased while his reputation mounted up more and more.